

主体的・対話的で
深い学びを実現！

アクティブ・ラーニング 実践講座

中学1年生 ●
総合的な学習の時間



授業者

新潟県・新潟大学教育学部
附属新潟中学校

上村慎吾 かみむら・しんご

教職歴 11 年。同校に赴任して 6 年目。
指導教諭。研究主任。英語科。

実践校

新潟大学教育学部附属新潟中学校

◎ 1947 (昭和 22) 年、新潟第一師範学校
男子部附属新潟中学校として開校。2017 年、
『附属新潟中式「3つの重点」を生かした確
かな学びを促す授業 教科独自の眼鏡を育む
ことが「主体的・対話的で深い学び」の鍵と
なる!』(東信堂)を出版。

校長 柳沼宏寿先生

生徒数 354 人 学級数 9 学級

電話 025-223-8341

URL <http://jhs.niigata.ed.niigata-u.ac.jp>

教科を超えて学びの成果を 関連づけ、生徒自身の 「見方・考え方」に昇華させる

新潟大学教育学部附属新潟中学校は、教科学習や学校行事など、すべての教育活動での学びを、生徒自身が俯瞰・分析し、統合して、自分の「見方・考え方」として働かせられるようになることを目指している。そのために、生徒がすべての学びを振り返る活動を行うのが、「総合的な学習の時間」における『「生き方・学び方」の時間』だ。今号では、6ページに拡大して1年生2学期に行う全7時間の単元全体を取り上げ、教科・領域等を横断して生徒に資質・能力を育む授業づくりを見ていく。

単元計画 中学1年生 ● 総合的な学習の時間「『生き方・学び方』の時間」

ねらい 生徒が、自分にとって、学ぶことの意味や価値を実感し、学んだことを将来の自己の生き方につなげられるようにする。

授業時数 2学期に全7時間で行う。1時間目は2学期の最初に行い、2時間目以降は、学習が積み上がってきた11月から行う。

育みたい資質・能力 知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力、メタ認知*1

時数	概要	学習内容・活動
1	2学期の「問い」と「身につけたい力や態度・人間性等」を設定する。	年度の初めに立てた、学年末までに「なりたい自分の姿」とそれに迫るための「問い」について、1学期末の振り返りを基に見直し、2学期の「問い」と「身につけたい力や態度・人間性等」を設定する。
2	「GPS-Academic」*2の結果を振り返る。	1学期に受検した「GPS-Academic」の帳票を見ながら、自分の強みと弱みを客観視する。
3	学びの成果物を整理し、「パーソナルポートフォリオ」をつくる。	2学期の自分の学びを振り返り、「なりたい自分の姿」にかかわるものから、特に自分の成長を象徴するような成果物を選んで整理し、「パーソナルポートフォリオ」としてまとめる。
4 5	教科等の「見方・考え方」を基に、教科等の横断的な視点から学びを俯瞰し、整理する。	各教科の授業や学校行事などで得た、自分に有用だと思う学びを整理。それらから何を学んだのか等を付箋に書き、書きためた付箋の関連性を見いだすことで、教科・領域などを横断する視点で自らの学びを捉える。
6	学びを関連づけて自分の成長を実感し、これからの見通しを持つ。	2～5時間目で整理した自分の2学期での学びを俯瞰し、「なりたい自分の姿」と関連づけて、自分が成長したと思う点をまとめる。さらに、今後、どのように学んでいきたいのかを考え、これからの見通しを「ゴールシート」に書く。
7	自分の成長と今後の展望をグループで共有。メンバーからの意見を踏まえて、総括する。	6時間目にまとめた「ゴールシート」をグループ内で発表。メンバーから、質問やアドバイスを受ける。メンバーからの意見を踏まえて、自身の成長や学びへの見通しを再度確認し、3学期以降に向けての総括をする。

評価 パーソナルポートフォリオと「GPS-Academic」の2軸で形成的評価を行う。

*1 自らを俯瞰的・客観的に捉えること。

*2 ベネッセの教材の1つで、問題発見・解決に必要な3つの思考力(批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力)を選択式、記述・論述式、質問紙で多面的に測るテスト。中学領域は研究開発中。2017年度はモニター受検。

研究担当

教諭

瀬野大吾

せの・だいご

教職歴 11 年。同校に赴任して6年目。研究副主任。2学年主任。数学科。



『生き方・学び方』の時間』の概要

生徒が自身に必要な資質・能力を見だし、自ら学ぶように

文部科学省や国立教育政策研究所などから様々な研究指定を受けてきた新潟大学教育学部附属新潟中学校は、各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方、いわゆる「見方・考え方」を中核として授業を構想している。それまでの研究成果から、①意味ある文脈での課題設定、②対話を促す工夫、③学びの再構成を促す工夫を重視した授業づくりを全教科で展開。校内研究でもこの3つの重点を生かし、全教員で組織的に推進する。今回の授業者で研究主任の上村慎吾先生は、その意義をこう語る。

「私の担当教科は英語ですが、3つの重点で見ること、担当教科外の授業であっても助言することができます。それは、生徒の学びを横断的に捉えることにつながり、自身の指導にも生きています」と感じます」

2017年度は「豊かな対話を求め、確かな学びに向かう生徒を育む授業」を研究主題とし、「自らの学びを価値付け、学習内容と実生活のつながりを実感し、教科等を学ぶ意味を見いだすことができる生徒」の育成を目指して研究を進めている。その1つが、今回取り上げる『生き方・学び方』の時間だ。生徒が授業や学校行事などで学んだことを横断的に捉え直し、自身の成長や生き方にどう関係しているのかをメタ認知する場となる(図1)。

「中学校では教科の専門性が増すため、学ぶ意義を見だしづらくなり、学びから逃げてしまう生徒も見られます。そこで、学びの成果と自身の生活とのかかわりを実感できれば、生徒なりに学ぶ意義を捉えられるようになると考えました」(上村先生)

授業は、次のような考えを基に構成されている。生徒は、各教科等に

応じた「見方・考え方」を働かせることを通じて資質・能力を繰り返し発揮し、それにより、自分には何が有用であるかを自覚するようになる。そして、生徒なりの概念が積み上がることで、あらゆる場面で生きる汎用的な資質・能力になるという考えだ。

「2年前に初めて、卒業前の3年生が3年間の学習成果を整理する『パーソナルポートフォリオ』(以下、PPF)を作成しました。そのファイルを見ると、生徒は自分なりの文脈で様々な学習の成果を捉えていました。有用だと感じる見方や考え方は柔軟で多様であり、生徒固有の捉え方があったことが分かったのです」(上村先生)

そうした理解に基づき、同校は、その生徒なりに意味づけをして学びを積み上げ、自分に必要な力を見いだして、学ぶ姿勢を身につけることが重要だと捉え、授業は生徒自身が

設定した目標の達成に向けて学びを積み上げられるように工夫している。

単元構成のポイント

目標設定からまとめまでを年3回行い、スパイラルに成長

『生き方・学び方』の時間は、「総合的な学習の時間」(年間70時間)のうち、35時間を充てている。

授業の進め方は、全学年で統一。生徒は、年度初めに「なりたい自分」を設定し、その実現に向けた「問い」を立て、授業や学校行事などで学びを積み上げていく。そして、学期末にそれぞれの学習成果を整理して「ゴールシート」(P.26図2)にまとめ、自身の成長を実感し、次の学びへの見通しを持つ。この流れを3年間続けることで、生徒はスパイラルに成長していくと、研究副主任の瀬野大

図1 『生き方・学び方』の時間』の位置づけ



*新潟中学校提供資料を基に編集部で作成。

1 2学期の目標設定

▶▶▶ 1時間目



1学期の「ゴールシート」(図2)を見て、さらに2学期にどんな行事があるのかなどを考慮した上で、2学期に「なりたい自分」に迫る「問い」と「身につけたい力や態度・人間性等」を設定。それらの内容は、1学期に立てた内容から変えても、変えなくてもよい。その後、各自が立てた内容をグループ内で発表し合い、目標に向けて頑張る雰囲気をつくった。

2 GPSの振り返り

▶▶▶ 2時間目



7月に受検した「GPS-Academic」(以下、GPS)の帳票を渡すとともに、帳票の見方を説明。生徒は、GPSのcan-doリストを基に振り返りを行い、自身の強みと弱みを可視化した。そして、自己評価とGPSでの評価との間にずれがあれば、なぜずれがあるのか、評価がよければさらに伸ばすためにはどうすればよいのかを考え、ワークシートにまとめた。

吾先生は語る。

「1学期と3学期、1年生と2年生の『ゴールシート』を見比べると、明らかに問いの質が高まり、学びの成果の示し方もより論理的で、表現

豊かなものになっています」

授業の内容は、研究部のメンバー全員で練り上げ、授業前に担当教員にその内容やワークシートなどを発信し、共有している。

授業づくりの工夫①

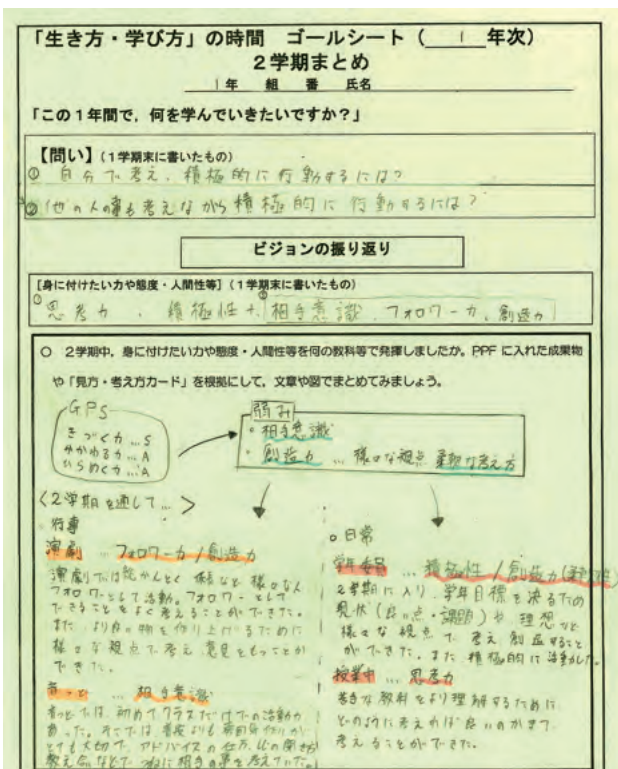
相互評価でメタ認知を促し、より質の高い学びに

「生き方・学び方」の時間」での3つの重点を生かした授業づくりは、次のようになる。例えば、年度初めに「なりたい自分」とそれに迫るための「問い」を設定するが、それが教員から見て短絡的だと思う内容でも、生徒には直接指摘はしない。1つめの重点である、生徒にとって意味ある文脈で課題を設定させるためだ。

「自分の内面から湧き出た問いでなければ、追究したいとは思いません。なりたい自分に近づきたいという思いは、どの生徒でも持っています。その目指す姿を引き出し、達成することで別の課題が出てきて、次の目標が見えてきます。その過程を大切にしなければ、学びに向かう力は育たないと考えています」(上村先生)

生徒が自身の考えをメタ認知し、見直すきっかけとなるのが、2つめの重点である対話だ。例えば、「問い」を立てる際、1年生にはロールモデ

図2 『生き方・学び方』の時間 ゴールシート」生徒の記入例



1年生が2学期末にまとめた「ゴールシート」。授業や学校行事、委員会活動で、どのような力を発揮し、何の力が身についたのかをまとめている。また、GPSの結果からは自分の強みと弱みを見だし、強化したい点を明らかにしている。
*新潟中学校提供資料をそのまま掲載。

3 ポートフォリオにまとめる ▶▶▶ 3時間目



授業でのワークシートや学校行事後を書く振り返りシートなど、2学期の様々な成果物の中から、「なりたい自分」を象徴するようなものや、自分の成長に重要だったと思うものを選び、「パーソナルポートフォリオ」(P.28 図4)としてファイリングする。そして、各自が選んだ成果物と、選んだ理由をグループ内で発表し、互いの学びを価値づける。

4 見方・考え方を基に学びを整理 ▶▶▶ 4・5時間目



授業や学校行事、部活動などで学んだことの中でも、自分が「大事だ」と思った学びについて、その学習場面はどこか、なぜそう思ったのかを付箋に書く。次に、付箋の内容全体から共通点や相違点を見いだしながら関連づけて「見方・考え方シート」(P.29 図5)にまとめ、教科等の横断的な見方や考え方を明らかにする。

ルとなるよう上級生のゴールシートを見せ、2・3年生には過去のPPFなどと今の自分とを対比させて、次の目標を見いだせるようにする。また、「なりたい自分」や「問い」をグループ内で共有する場を設け、他者と比較できるようにする。

「教員がモデルを提示するよりも、周りの生徒の考えに触発される方がより自発的な行動につながり、よりよい内容になっていきます。対話は、他者や過去の自分から学び、今の自分を見直す、メタ認知の機会として重要です」(瀬野先生)

同様に、PPFや見方・考え方シート(P.29 図5)、ゴールシートなども、グループで共有し、相互評価する。

「同じ授業を受け、同じ学校行事を経験し、自己の成長という目的も同じですから、生徒たちは向上心を持って互いに評価やアドバイスをしています。普通なら隠しておきたいような欠点もさらけ出せるのは、それによって他者から得られるアドバイスが自身の成長につながると分かっているからでしょう」(上村先生)

*3 2017年度はモニター受検。

授業づくりの工夫②

自己評価に客観的な評価を加え、自己理解をより深める

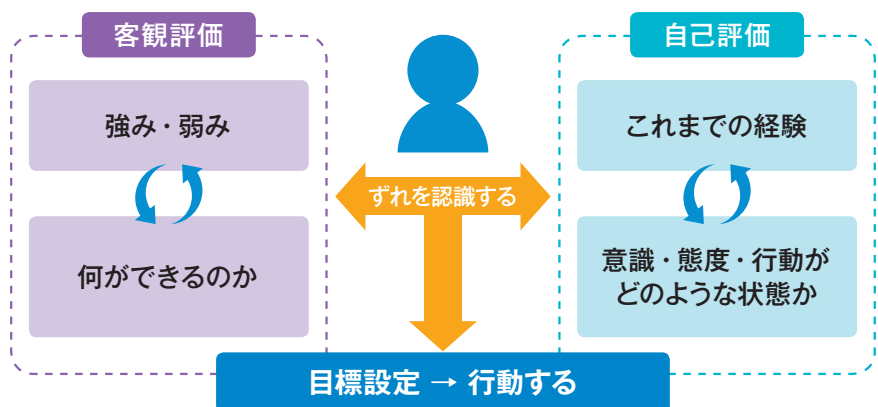
自己評価する際の指標の1つとして、客観的な評価を取り入れたいと考え、2017年度にベネッセの「GPS-Academic^{*3}」(以下、GPS)を実施した。

「PPFは、生徒が自身の学びを俯瞰し、自己評価する手法として有効ですが、ともすれば自己満足に終わってしまう側面もあります。そこで、

強みや弱みを客観的に見る手立てがあれば、PPFと併用することで、より自己認識とのずれを理解でき、次の目標設定や具体的な行動に有効に働くと考えました(図3)」(上村先生)

実際、生徒のGPSを活用した振り返りを見ると、「気づく力が弱かったから、相手意識を持つようにする」「創造力はあった。もっと伸ばすために委員会活動時にアイデアを出したい」というように、弱みを改善する場面とともに、強みを伸ばす場面も具体

図3 客観評価(GPS)と自己評価の位置づけ



GPSの客観的な評価とPPFなどの自己評価を組み合わせることで、自分の身についた力と課題を深く認識でき、次の目標をより課題に即したものに設定できる。*新潟中学校提供資料を基に編集部で作成。



前時までに4時間かけて行ってきた学習の振り返りを総合的に見て、2学期中に目標としていた力や態度を、どこでどのように発揮していたのかをまとめる。言葉だけでは他者に伝わりにくいので、図を積極的に活用するよう、上村先生は伝えた。1学期末に書いた「ゴールシート」よりも、文章のまとめ方や図に工夫が見られ、生徒それぞれに個性豊かなまとめとなっていた。



4人グループとなり、発表者・記録係・アドバイザー（2人）役を順番に務めながら、前時にまとめた自分の成長や課題を、成果物を根拠として示しながら発表する（1セット10分間が目安）。その際、アドバイザーは、発表を聞いて質問や改善のアドバイスをする。最後に、他者評価を踏まえて「ゴールシート」を加筆・修正し、2学期の学びを総括して、次に向けての「問い」を練り直す。

的にイメージできていたという。

「GPSで測れる3つの思考力*4は、大切な力であり、身につけていきたいと認識しているからこそ、生徒はGPSの結果をより前向きに捉えられるのでしょう」（瀬野先生）

授業づくりの工夫③

成果を俯瞰し、教科を超えて学びを価値づける

学びを俯瞰・整理して関連づけるという段階を踏んで、「ゴールシート」にまとめる。これは、3つめの重点となる学びの再構成を促す工夫である。その過程で重要な役割を果たすのが、「見方・考え方シート」の作成だ(図5)。自分の成長に有用だと思った学びを付箋に書き、共通点などを関連づけて、教科独自に有用だと捉えた知識や考え方、他者とのかわり方などを教科等横断的に捉える。これにより、どのような場面でも汎用的に発揮できる資質・能力を見いだすことができる。

「見方・考え方シート」には、生

徒それぞれに、「比較・関連づける」「振り返る」「経験を生かす」「他者の意見を理解する」「客観視」「柔軟性」など、自分の学びから出てきた資質・能力が並ぶ。

前年度は、各教科等の単元ごとに付箋に書かせていたが、生徒が何か書かなければと思い、特に有用だと感じなくても書いたり、書く機会が多くて作業的になり、中身の少ないものになってしまったりという問題が出てきた。そこで、2017年度からは、

『「生き方・学び方」の時間』にすべての教育活動の中から生徒自身が精選して付箋に書くようにした。

「各教科には単元の振り返りシートがあり、生徒はそれを見ながら自分にとって本当に役立ったと思える学びを付箋に書き出していきます。また、教科学習だけでなく、学校行事や委員会活動、個人的な活動も含めることで、授業での学びが授業以外の場面でも活用できることに気づき、学びを価値づけられるようになりま

図4 「パーソナルポートフォリオ (PPF)」にとじるもの

◎全学年に該当するもの

- 教科ファイル（ノート、ファイル、ポートフォリオなど）、学活ファイル、道徳ファイル、「総合的な学習の時間」ファイル、生活ノート、振り返りノート、GPSなどテストの帳票など

◎学年に該当するもの

- 入学時の決意、体育祭・演劇発表会といった学校行事の文集・振り返りシートなど

◎個人に該当するもの

- 各委員会活動、部活動での作品や賞状、個人の趣味での作品やコレクションなど



PPFづくりでは、1年生はどれも大切なものに思えて、とじるものをたくさん選びがちだが、2年生になると選択眼が鍛えられ、とじる枚数がぐっと減るという。

*4 批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力のこと。中学生対象のGPSでは、それぞれ、「気づく力」「かかわる力」「ひらめく力」としている。

一般化、抽象化した投げかけによって 生徒の視点が広がる



ベネッセコーポレーション
アセスメント開発部
GPS企画担当

岸本きよら
きしもと・きよら

2014年度から学校事業に携わる。進研模試、模試デジタルサービス開発、思考力育成教材開発、P検企画・開発などを担当。GPS企画開発は2016年度から担当。

7時間目のグループワークの授業を見学した際、生徒たちが、よい評価ばかりでなく厳しい指摘も含めて、メンバーの言葉をしっかり受け止めていたのが印象的でした。日頃の授業や学級づくりで、発言しやすい雰囲気をつくり、生徒間の信頼関係を築いているからこそ、そうした姿勢を持っているのでしょう。また、活動中にメンバー全員が何らかの役割を担うことで、GPSの3つの思考力がフルに活用されていた点もよかったです。

一方、先生はファシリテーターに徹し、例えば、「このグループではこんな発言がありました。とてもよい気づきですね」と、視点が広がるような投げかけをされていました。その際には、表現を一般化したり抽象化したりして、生徒の理解を深める工夫も感じられました。

評価の1つとして、GPSを活用していただきましたが、振り返りの時間をきちんと確保し、生徒が強み・弱みを見いだせるように工夫されていま

した。身についたことは成果物を見れば実感しやすいけれど、自分の弱みは具体的には分かりにくい。客観的な評価のGPSを、自己評価にない視点としてうまく取り入れられていたと思います。

今後、大学入試では、思考力・判断力・表現力がより問われていきます。ただ、生徒はその重要性を知識・技能のように認識しづらく、先生方も説明しづらいと思います。そうした中、附属新潟中学校では、『生き方・学び方』の時間を中心として、それらの力が生きていく上で必要だと生徒が実感する場面をつくり、自ら高められるようにされていました。中でも、自分に必要な資質・能力を見いださせようとするのは、素晴らしい視点です。国語が得意な生徒がいれば、絵を上手に描く生徒もいるように、資質・能力を発揮できる場面は生徒によって違います。そうしたことも含めて、生徒に自身の生き方を問う授業だったと思います。

す」(瀬野先生)

成果と展望

教科等の見方・考え方を働かせて 資質・能力を高める生徒たち

これらの取り組みにより、1年生

でも目的意識を持って学びを振り返ることができるようになった年度末には、自分の学びを客観的に分析して、自分なりの「見方・考え方」を働かせてきた様子が、「ゴールシート」からうかがえるという。また、GPSでも、全国平均より高い結果が出て

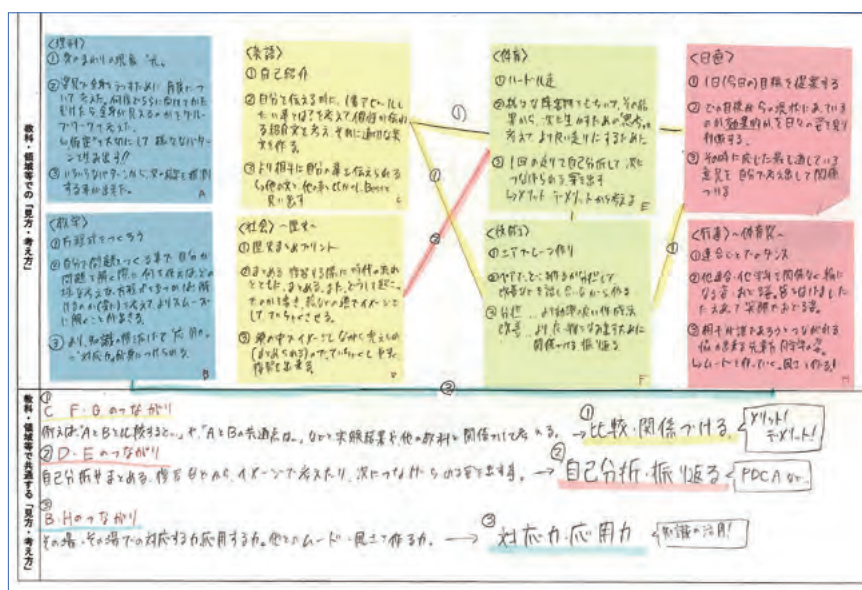
いる。

「育成を目指す資質・能力は、生徒一人ひとりが認識するものであり、教員はそれを出させる教育活動を展開することが重要なのだと気づきました」(瀬野先生)

今後の課題は、生徒の資質・能力の高まりをどのように評価するか。現状では、PPFとGPSの2軸で評価を行っており、資質・能力をその生徒なりに形成的に評価できるようにしている。半面、今後整備を検討しているルーブリックでは、評価が輪切りになりやすく、それが適切なのかどうかを模索しているところだ。

「多面的・多角的評価の重要性が指摘されていますが、まさにその通りで、自分たちの評価のみでも外部の評価に頼ってばかりでも適切な評価はできず、目的に応じてどのような評価をするのが鍵になると捉えています。来年度は、評価も含めたよりよい授業改善を進め、教育目標である『生き方を求めて学ぶ生徒』を育てていきたいと思っています」(上村先生)

図5 「見方・考え方シート」1年生の記入例



付箋には、①どのような学習・活動等で、②何(何と何)に着目し、どのように考えたのか、③なぜ有用だったのかという3つのポイントを、教科・領域名とともに書く。異なる領域でも実は関連があることが視覚的に分かるようにするため、付箋は領域ごとに色分けをしている。*新潟中学校提供資料をそのまま掲載。